

## 時間学国際シンポジウム 2018「中世日本の時間意識」：TIMEJ

2018年8月1日から8月3日、山口大学吉田キャンパスにおいて、チューリッヒ大学と山口大学時間学研究所の協同主催（共催：日本時間学会）のもと、時間学国際シンポジウム2018「中世日本の時間意識」が開催された。中世日本社会で時間がどのように表象・知覚・経験されていたのかについての多角的検討を目途としたこのシンポジウムには、日本思想・歴史学・日本文学など多様な分野の研究者25名が国内外から参集し、3日間にわたって発表と討議を実施した。プログラムは「暦」「兵学」「朝廷と武家」「村落」「宗教」「身体」「市場」という7つのテーマから構成され、各テーマごとに発表と指定討論者によるコメント、ならびに全体的討議を行う、という形式でシンポジウムは進められた。なお日本側のコーディネーターには、森野正弘先生（山口大学）、細井浩志先生（活水女子大学）にご担当、ご尽力いただいた。

第1日目、8月1日の午前の部では、シュタイネック・ラジ先生（チューリッヒ大学）、藤澤健太時間学研究所所長の開会挨拶の後、エムデ・フランツ先生（山口大学）をコメンテーターとして、「暦」「兵学」に関連する報告と討議が行なわれた。まず、細井浩志先生の「日本中世の暦と時間研究」と題した報告では、暦ないし暦注の研究史の丹念なレビューの後、中世日本社会の時間意識の地理的収斂ないし分散の相貌を析出する上での暦注の史料的重要性が、とりわけ『篋篋内伝』の分析から呈示された。続いて登壇されたブルマン・クリスティーナ先生（フロリダ州立大学）の「中世日本における軍事的選日に関する一考察」では、中世の武士層においても暦を参照項とした朝廷的・古代的な選日文化が継承されていた可能性が緻密な資料踏査から提示され、また上野太祐先生（神田外国語大学）「中世兵法の時間試論」では、中世の兵法書から読み取られる時間意識の特徴とその通時的変化（たとえば合戦の場に流れる時間を神へと一元的に回収する表象体系（「天時」）への人為的契機（「人事」）の挿入など）について詳論された。ついでエムデ先生からは、それぞれの報告についての個別的な質問・指摘を通して、暦と時間、兵学・軍事と時間という問題系の意義を包括的に浮き彫りにするコメントがあり、全体質疑を含めてこの部門の分析枠組みをより深化させる様々な視点が提起された。

同日午後の部では、小山恵美先生（京都工芸繊維大学）をコメンテーターに迎え、「朝廷と武家」というテーマに関連した発表と討議が行なわれた。まず第1報告である「ほととぎす（郭公／時鳥）の初音に投影される宮廷女性の時間意識」（森野正弘先生）では、中世宮廷女性のテキストに見られる時間表現が『古今集』的な時間・世界像によって構造化されていたこと、またそれゆえに王権の勢力版図の内外という地理的要素が彼女たちの叙述するテキスト内世界の時間性を大きく画定づけていたことが、ほととぎすの鳴き声に対する表現様式を手がかりとしつつ説得的かつ整然と呈示された。続いてミュラー・シモン先生（チューリッヒ大学）の報告「後醍醐天皇の内裏における一日：時刻制度の検討を中心に」では、東山御文庫本『日中行事』と後醍醐天皇『日中行事』の内容・構造に見られる比較

分析を通じて、後者つまり中世の朝廷に見られた時刻単位での行程の特徴（とそこには含まれた微視的な政治学）が、空間の関わりにおいて緻密に論じられ、チョルチャーロ・アレクサンドラ先生（チューリッヒ大学・博士課程）「鎌倉幕府の公務史料における時間」では、『建治三丁丑年日記』『鎌倉年代記』『武家年代記』に見られる時間表記の様式についての基礎的な分析が行なわれた。小山先生からは、ご自身の専門分野の視点・知見をまじえた各報告に対する的確で刺戟的なコメントがあり、このコメントを受けつつ会場全体で質疑応答が活発に繰り広げられたのち、シンポジウム第1日目は終了した。

シンポジウム2日目、8月2日の午前の部は、「村落」をテーマとした報告からはじめられた。前近代の農業従事者による夜間労働を扱った「前近代の農業従事者の夜間労働」（右田裕規・山口大学時間学研究所所員）が発表された後、コメンテーターである辻正二先生（保健医療経営大学）から、日本村社会の普遍的・固定的性格を射程に入れた考察の必要性がある旨の指摘が行なわれた。続く「宗教」部門では、コメンテーターとして板東洋介先生（皇學館大學）にご参加いただき、湯浅吉美先生（埼玉学園大学）、頼住光子先生（東京大学）、シュタイネック・ラジ先生、シュテーヘリン・エティエン先生（チューリッヒ大学・博士課程）、真木隆行先生（山口大学）、星優也先生（佛教大学・博士課程）による発表が午前・午後の部を通して行なわれた。まず湯浅先生の報告「鎌倉時代の寺院における時間意識」では、『鎌倉遺文』所収の文書類の時刻・時間表記についての定量的な把握・分析から、各寺社の内部的な時間制度ないし時間表記の特徴と、寺社間の差異と類似性をあかるとした綿密な成果が発表された。また頼住先生の報告「道元の時間論」で扱われたのは、『正法眼蔵』「有時」巻に見られる時間概念についてである。同テキストの時間論の包括的な解説——たとえばテキストで主張されている存在と時間の不可分性がどこまでも他存在との相互依存を前提したテーゼであること、また同テキストが「修行と成道」を媒介して感得される特権的な時間について、不可逆的・断片的・外在的な世俗の時間とは対称的な、可逆的・非連続的・モナド的な時間として特徴づけていること、など——を通じて、「無我」概念に基礎づけられた道元的もしくは仏教的存在論に立脚した時間論・時間概念の特性について詳細な検討が行なわれた。続くシュタイネック先生の報告「道元の著作にみる時間の表記と時間の思想」では、同じく道元の時間論を主題にしつつ、中世日本の宗教世界固有の時間性が論じられた。具体的には、道元のテキストに見られる表記様式分析から、（先行研究の定見とは異なり）道元のとらえる「永遠の今」が分節化された時間を前提しつつ成り立っていること、道元のテキストにおいては修行期間についての量的記述が仏祖の時間の記述と密接に結びついていること、等々についての指摘から、宗教的な時間である「而今」と世俗的な時間に属する「十二時」とが、道元の思想においてどう関連しあっているのかについて精緻な考察が展開された。また「鎌倉初期曹洞宗の時間概念」（シュテーヘリン先生）では、道元の時間思想が弟子筋の注釈書においてどう転回・再解釈されたのかという思想史的問題系が取り扱われ、真木先生の発表「平安時代末期における上皇出家の質的変容」では、中世中期転換前後の宮廷社会に見られた特徴的な通過儀礼＝

出家の時系列的な変化を手がかりとしつつ、現世的論理と来世的論理の相互貫入によって代替わり前後のエスタブリッシュメントが揺れ動く平安的状况が、中世に到る道程でどう変わっていったのかについて示唆に富む議論が展開された。2日目の最後の報告は「中世神話と時間意識」(星先生)であり、土公神に関連した記述群の時系列的解析から、暦と季節の運行をめぐる神話と身体儀礼が中世の郷村社会において(再)成立する過程が丹念に跡づけられた。以上の報告を受けて、コメンテーターの板東先生が、2日目の全報告の相互連関についての的確な総論を呈示されつつ、各報告者への個別的な質問と話題を提供された後、全体討議を経て2日目を終了した。

シンポジウム最終日8月3日の午前は、アンドレーワ・アンナ先生(ハイデルベルグ大学)をコメンテーターに迎えて、「身体」部門の発表が行なわれた。第1報告として、陳ダニエラ先生(チューリッヒ大学)から『頓医抄』の婦人部における身体と時間」と題した発表があり、中世の医学書において、女性の身体的な時間が、自然とりわけ天体の運行と類推的に結びつけられつつ、循環的・円環的に表象されていたことが論じられた。続く報告では、斎藤菜穂子先生(國學院大學兼任講師)から「中世女性の月経と時間意識」と題する発表があり、では、中世女流日記文学『うたたね』『とはずがたり』の対称的な生理表象の比較分析を通じて、循環的な身体現象が中世の宮廷女性たちに対してどのような時間を生成したのかについて、とりわけ個的主体やジェンダー的共感の確立・喪失という視点から検討が行なわれた。以上を受けたアンドレーワ先生からのコメントでは、従来の穢れ概念とは異なる解釈を呈示した両報告の新機軸的な視点が掘り下げられると同時に、中世女性史の枠組みを超えた普遍的で人類学的な視点・解釈の可能性が提起された。

3日午後は、コッホ・アンゲリカ先生(ゲント大学)がコメンテーターとなり、「市場」部門の発表が行なわれた。まず桜井英治先生(東京大学)の報告「中世日本における労働時間と賃金」では、中世のモノの価格が需給バランスによって概ね画定されていたのとは対照的に、労働力・サービス価格が需給関係の影響を受けなかったという事実を中心に、労働の時間に対する中世固有の思考様式(時・刻単位での労賃給付、労働力価値を見積もる思考・意思の不在)とその史的意義について論じられた。続く報告「徳政と時の戻り」(片岡耕平先生。チューリッヒ大学)では、売買・貸借契約を反故にする政治的営為=徳政を時間論的に読み替え、徳政が理想的かつ想像的な過去の再現前として解釈できることについて、中世の所有関係の特徴に即した明晰な分析が呈示され、アマン・フローニ先生(チューリッヒ大学・博士課程)の「中世日本における香の流通・消費と時間」では、『薫集類抄』の時間表記の特徴についての基礎的・定量的な分析が報告された。コッホ先生からのコメントならびに全体の討議では、業種による賃金体系の差異の有無、徳政における時間政策の具体、香料と時間の結びつきなど、各報告に対して詳細な質問と意見が交わされた。

当日の最後のプログラムでは、以上3日間の全報告をふまえた、佐藤弘夫先生(東北大学)、板東先生、辻先生による総括が行なわれた。佐藤先生は、(一元化・線形化された近代的時間とは異なる)地域・集団・階層ごとに枝分かれした中世日本社会の時間の多様性

という視点から今回のシンポジウムの各報告をまとめられた上で、それらの時間的多様性を中世社会の巨視的な社会構造（たとえば政治権力の空間的分散性など）と関連づけつつ考察する必要性を今後の指針として呈示された。板東先生は、佐藤先生のコメントを引き継ぎつつ、原始的な社会が含んだ時間の多様性の一元的収斂が古代国家によって進められたことに対する反撥作用（とりわけ仏教的時間への信仰を基軸とした反撥作用）の帰結として、中世社会の多様な時間性がとらえうることを提起され、また辻先生からは社会学的な視点から全体の報告を再定位するコメントが行なわれた。以上の総括の後、シュタイネック先生ならびに藤澤所長から閉会挨拶が行なわれ、シンポジウムの全行程は滞りなく終了した。（右田裕規）